

広島県立美術館

研究紀要

第9号

- わが国初の私立美術館—浅野家・観古館について…………… 村上 勇 1
- 巖島図〈Ⅱ類〉小考…………… 知念 理 25
- 『改正香道秘伝』（下巻）の翻刻（その一）…………… 石橋健太郎 33
- アレクサンダー・コールドー
《ヴァーティカル・ホワイト・フレーム》における一考察…………… 石川 哲子 1

2006



BULLETIN
OF
HIROSHIMA PREFECTURAL
ART MUSEUM

No.9

2006

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM
HIROSHIMA JAPAN



『改正香道秘伝』（下巻）の翻刻（その一）

石橋 健太郎

はじめに

「広島県立美術館 研究紀要第7号」において、当該の「香道秘伝書校正」上下二巻のうち、上巻の翻刻を行った。本稿では、紙面の都合上、下巻の半分を翻刻する。

本稿では成し得ないが、今後、「改正香道秘伝」の内容を、他の香道書のそれと比較検討することにより、香道の成立過程を一部なりとも明らかにしていきたい。

上巻には、「雪月下集」、「志野宗信記」「香合式」「宗温六十一種香名」の四書を収載する。下巻には、「炭翁齋香炉之図」、「武部隆勝香之筆記」、「十組香之記」、「香之記」の四書を収載する。本稿では、「炭翁齋香炉之図」、「武部隆勝香之筆記」を翻刻した。

尚、当該資料の装丁は、当初のもののように見受けられる。

香道秘傳書校正巻下

大枝流芳校正

炭翁齋香炉之図

香炉事依御尋、志野入道相伝之旨、

存出次第記、進候、定而、失念共可有之

候間、猶御不審於承者、可申入御事、

多候間、先大形に申候也如左、

元龜四年 炭翁齋宗入、

二重香炉 灰五合、



神前に置物也、沈を造如此置、

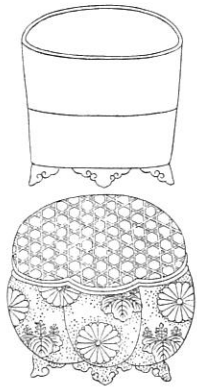
ほや香炉灰五合、



日月を拝する時、香を焼物なり、

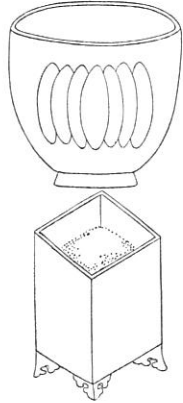
聞香炉灰五合、

桶がわ香炉灰五合、



火とり香炉灰五合、

しほげ香炉灰五合、



四方香炉灰四合、

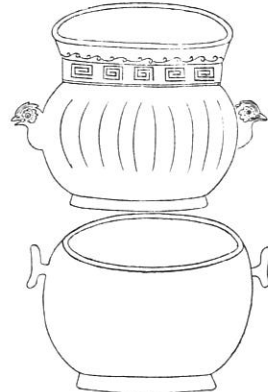
まわり香炉灰五合、



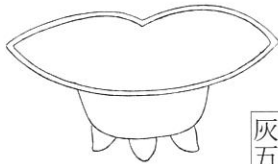
檀香炉灰六合、



すのこ香炉灰六合、



舟香炉又一葉共云、
灰五合



火鉢香炉灰六合、

是八別也、

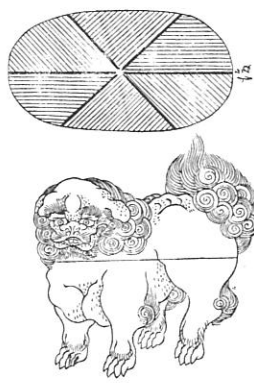


鴨のこうろ灰六合、



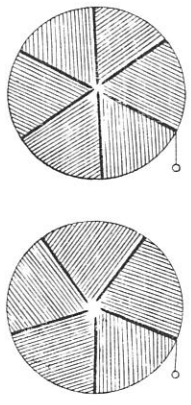
をしの香炉灰六合、

鴨、鴛、獅の香炉のはしめ如此、
獅乃香炉、



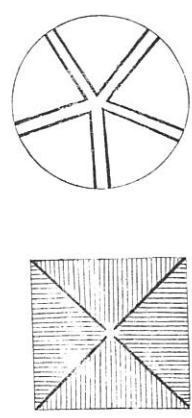
前 此前より付始申候 灰六合、

六合乃箸め、
かくのことし、五合の箸目如此、



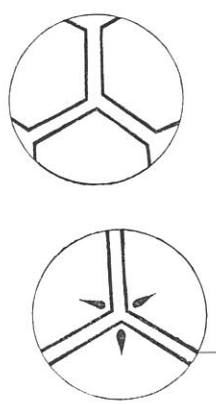
○置前のあしより はしめて付る也、
○置前の足より 付始む、

灰草なる箸目如此、
置前の足より 付始申候、



四方香炉箸目如此、

灰乃押様、常の草なるに、
置前の足より付始、
是も同、
是 **は**、



置前の足より箸目付始、

二重香炉、



灰六合

ほり物乃盆罌にハ、
花さき絵の方へ向也、
人前に出時ハ、
花の本を、向なり、



丸盆に置時ハ袋の緒乃あまり 此 **通** 也、

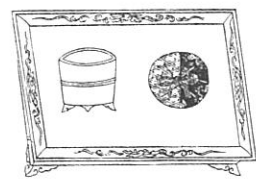
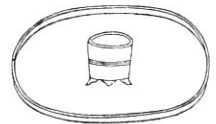
丸盆置合如此、



四方盆如此、



くつがた盆同、長盆二置如此、

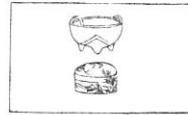
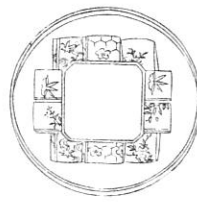


長盆も同、

香合に名香入らるる次第、

かくのごとし、

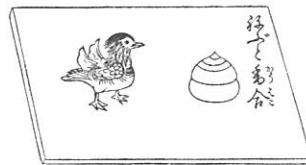
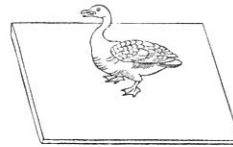
卓を床の中二置、櫻香炉、



鴨鴛の香炉、

かんばん二可然候、

ねぶと香合



れいし香炉など可然候、

絵一幅も二幅一對もうけるなり、

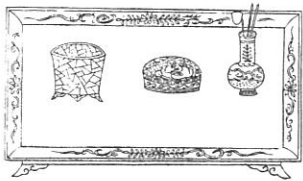
かんばん二二置如此、

長盆に聞香炉、三色如此、

違棚二而も

盆なしに床に置時如此、

少大キ悪候、先大方



何も袖さき二置、

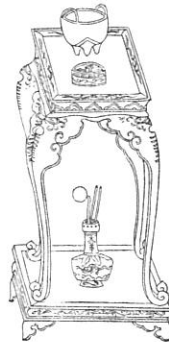


箸先の方左かつて、

右かつてにても同前置也、

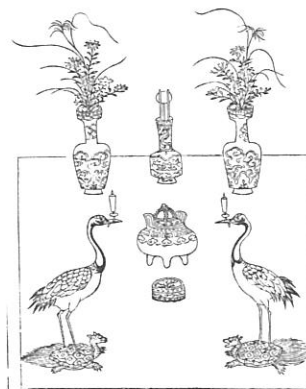
中央の卓筋には不置座禪、

又ハ空焼に置、



香筋起に灰をし香箸、
さし様、如此さすなり、

もろ筋、



小包紙広さの寸、

図のごとく

たたみでの寸法、

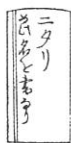
(二タリ、如此名を書なり)

木の箸の寸法、

杉の如のこまかに

すぐなるにで、

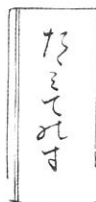
拵なり、



大包皮広さ寸法、

四寸五分二、三寸八分也、

(たたみでの寸)



夫聞香之明德古往今來三國俱以卿慕焉。或却穢惡而來神仙或癒沈痾而生娛樂不可勝計。故瞿曇口

說六珠價值百千兩金也。建部隆勝

公嘗傳授異法。誠使獲聞香能知之

聖妙而詳弁產出郡縣的分芬芳淺

深時人竊以假名結之則忽別真偽

乎百發百中而已、

干時天正第三乙未仲秋吉辰

洛下翠竹菴道三筆之

隆勝入道殿まいる

香炉之図考正、

禪香炉 禪字考るに、字書に無之、

今本書以異本改禪字、

舟香炉の下、灰五合と異本にあり、よ

つて今補之、

緒のあまり、此分之分字一本作通今改之、

長盆に聞香炉三色如此、違棚二置之、

置也、異本に違棚に而もに作る、此方はな

るべし、因て本書改之、

箸大手法 大手法と云事、異本に、

作先方、これに随て本書改之、

香起に 異本各香筋起に、作る、今是

にしたがひて、本書加筋字、

マタリ

(マタリ) 此香包書付のマノ字ニノ字に、異本に作る、よつて今改之、

奥書の中 曰雲 乃二字、曇の一字に

作るべし、依異本改之、

役 今異本によりて使字に改む、

右岷翁齋宗入香炉乃図考正

し、図も又あしきものハ画工に命し、

これを改め侍る、

大枝流芳考正、

武部隆勝香之筆記、

香炉渡申次第之事、

一 貴人に渡申事、香炉の置前乃足を

まハし、左の手ニすへ、右の指さきを、香

炉の中より下目にそへていかにも謹

而、可進上也、

一 等輩の人に渡すときハ、是も香炉の置

前の足をまハし、左手にすへて右乃手

を香炉の口脇にそえて、渡也、

一 下輩の方へ渡時ハ、右の手にて、香炉の

口脇取、人さし指を一つあげて、下輩の者

の手の上に置なり、

一 女房衆に渡ハ、よきほどの所に、下に置

べし手に不可渡也、

一 盆にすへて香炉渡申時ハ、香炉の置前の足、人の方へをしまハして遣て、香炉斗取上、きかれ候、又盆ながらもきかれ候、其様躰ハ、先両の手にて盆ながら取上、左乃手にて盆を持、右の手にて香炉のせかい乃きハに添て、常のごとく被聞候、如此様躰ハ候へ共、取上て被聞にハおとり申候、又盆の事、ほり物の盆内、赤の盆、杳形の盆、かんばん卓、色々差別可在之也、

一 香炉床に置事、

盆絵に釈迦、観音、達磨、布袋類懸聞れば、茶湯の時ハ、床に香炉置べからず。おもてむきの飴三具足の時ハ如此の人形絵も懸べし、山水花鳥菓子絵などにハ、香炉置べし、又香炉置所の事、志野入道ハ聞香炉八床の軸さきに、必可置よし申候き、雖然当世ハ香炉名物により候故、大略床の中に置候、人多し、又置所軸はづれを、香炉の真中にあて候か、又は軸はづれを、盆のはしに、あてゝ可置申候、又懸物なくバ、張付乃次目をめあてとす、猶口伝に申也、軸もとハ小壺の置所なる間、天目茶入に置

合申候、何も此外の者置事なし、

一 飴に置香炉に火をとらず、銀不置箸目ハ付候、三度に一度ハ只灰をかきあげ、はたを能きんじて置候、又は箸目二つづつ、かぎ香炉に付事も有略儀也、

一 銀乃寸法九分四方、角を一分きる也、いかにもあつき銀よし、

一 空焼に銀不置、空だき八床にもをき申候、又座敷にても広縁などにも、中央卓の上に置也、

但空焼乃香炉ハ、鴨の香炉、禪香

炉すべり香炉よく候也、

一 香炉に入、火の炭くぬ木乃丸木をたつねをく、炭おこり候間、火をかへてよく灰をあたくめ申候、炭ハ兼てこしらへて置也、炭の長さ七分は、四五分也、

一 火をとる事、囲炉裏又ハ風炉にても座敷にて、取申候、自然仕合むつかしくば、

かげよりにても、灰ををし箸め二つづゝにても、又置、前斗に、箸め三ツも付申候、

一段、是ハ略儀なり、
一 卓にかぎ香炉不置也、

一 香炉袋に入れて、盆に置事あり、其時ハ香合袋に入、惣別香合ハ何時

も袋に入れてよし、沈香入故也、

一 香炉名物にて、客人の度々所望候て、

取出候ハ、五度に三度ハ火をとらず、只見
せる事あり、又兼て、床にも置べ

し。香炉よくもなくバ、火不取置、たかす

バ、取出まじく候、

一 香をたく事空焼にハ、いかにもかうばし、
く、はなくとしたる沈香をたかれ候て、

可然のよし申伝るなり、

一 名香をハ空焼には不焼候、

一 雪中にハかならず香をたくよし、

古人の申也、

一 名香一種ハ不焼、二種可然候、又折から

静おもしろく候ハ、三種にても五種に

ても、後次第よき香を焼申候、

一 太子(号法隆寺) 蘭奢待(号東大寺)

如此名物の香之内、焼候ハ、重而香つ

がず候、たとひ無案内にてつがれ候へと

申共、無所持よし可然候、亦、香之道を

知候か、しらするかを見んとて、しきりに

所望之事有、其時ハ沈外と云、香可

然候、沈外なくバ、赤梅檀、無名丹霞と

申香などよし、

一 十一種名物の香の事、

法隆寺(太子共申) 蘭奢待(東大寺)

逍遙 三芳野

紅塵 古木

中川 法花経

花橘 八橋

(追加) 園城寺

一 五十種之内乃香、又其外の名香共、四
季・恋・雑・祝言、其折をたくへし、

一 名香包紙の事、大包、小包有、又ハ香

合ちいさくバ、なをも小包なるべし、

一 名香十一種ハ包折やう別にあり、

一 香合に香包て入事、三種五種よし、銀
をも入包紙、ぎん以下やう有、口伝に

申候、

一 香合に空焼乃沈香五きれ入なり、沈乃

寸、長さ三分幅二分、厚さ一分也、

一 鴨、をし、獅の香炉にて火を取、香聞事

あらバ、羽にてワかたる。香炉ハ頭を左へ

なし、足を手にすへて聞べし、又羽より

下の半分にてわりたる、香炉ハ鴨のむね

を聞人の右の方へなし候、又鴨乃香炉、

駕香炉、獅の香炉との文字を入れて

申てよし、

一 香を続事、座敷につらなりてある程

の人に、ことく見、たかせ候事もあり、香

所持候事、年寄人は火打袋に入候、又

若き衆ハ、はながミ乃あハひに包て持候

が能候、さて取出候も、主人の方を^恐て、

下座のかた、脇へ向て、ことくしく見候

ざるやうに取出候なり、香の数^を持事

吉、香一種、当季の香一種、雑色々に、

一 二種沈外之類、名にても一種此分

五種斗持てよし、

一 香を聞とて、次の人に一札して請取

てよし、(主人ハ不及札、ホ輩の人には一札可有之。)

一 火を取たる香炉、盆にすゆる時、香炉の

底をすぐり、あつくバ、盆二すえず、盆

に址付故也、

一 香炉の灰を押事、中をせかいより少

高く^かきあげてをすへし、

一 香炉一かとなくバ、火をとらずしては、

床の置物に不置、塩げの類ハ、あひしら

ひ^にも置べし、法外なる故也、

一 名香可被焼時ハ、空焼禁する物也、

一 香箸の事、ざうがん金鉄、其外色々

雖有之、高麗箸、猶能候、長さ七寸

ばかりなるを用之也、

伽羅之分

東大寺 逍遥 法花経

三吉野 紅塵 園城寺

似 般若 ^黛

楊貴妃 玄宗 青梅

月 立田 斜月

法花 老梅 八重垣

丹霞 紅 薄紅

薄雲 上馬 八重菊

芙蓉 山陰 ちゝ見 (縮イ)

十九 芳村 奈良芝

帶 子糸 若菜

新伽羅之分

富士烟 花形見 初瀬

薄紅葉 富士 難波

武蔵野

羅国分

古木 八橋 月郎

寸代 菖蒲 端午 (本能寺ともいう)

鷲 二葉 松根

真^薦 沈外

真那班分

中川 白梅 蘭子

寒梅 早梅 寢覚

七夕 須磨 明石

雁金 假寝 松風

真那賀分

花橘 夕時雨 野分

日影花 雉子 有明

花宴

右名香木処様躰御尋候、伽羅、新伽羅、

羅国、真那斑、真那加、大形如此候、乍斟

酌〔注進之〕申候、乍去事多御座候而、定而

其紛可有御座候かと存候、被成其御心

得外見用捨専用候、以如件、隆勝、

名香聞之事、

一 法隆寺 太子

赤梅檀、聞いかにもやさしく、きやしやに

涼しく御座候、

一 東大寺 伽羅、聞をそく出る、又聞失

候やうに御座候て、又聞出申候、かやう

に四五度ほど御座候て、以後次第聞

かる候、ひやゝかに香出申候、

一 逍遙 伽羅、聞心ハ早く出申候、香ハ東

大寺よりハうすく御座候、以後ハ、前の聞同

前、

一 三吉野、伽羅、聞、東大寺よりハ少し早く

出申候、香もすこしうすく御座候而、以後

ハ前同前、

一 法花経、伽羅、聞ハいかにも和かに古く、

殊勝に御座候て、火末前に同じ、

一 紅塵、伽羅、聞少遅く出申候、香ふる

く、そこからき聞御座候、是ハ楊貴妃の

とめ香の由、一説申伝候、火末前に同じ、

一 古木、羅国のうちより出申候、聞先日

於御前、焼申候菖蒲と大形同前二候、

雖然、少香しづかに候、ほそがたき聞御座候、

火ずゑ菖蒲よりうすく御座候、

一 中川、聞上之真那班、如何にも香ふるく

御座候而、花やかにかろくと御座候、

一 八橋、羅国のうちより出申候、菖蒲同

前、雖然、香閑に古木より花やかに

御座候、火すゑハ古木同前、

一 花橘、聞まなかの上、焼出しはやく、

つよく出申候而、やがて失申候、三人より

外ハきかれふ申候、

一 園城寺聞上之伽羅の由申候、於方々

聞申候へ共、手次たゞしきを聞不申候

間、不存候、

已上十一種、

一 似、聞上々伽羅、東大寺より位無御座候、

聞はやく出申候、火末ハ東大寺と同前、

一 富士烟、聞新伽羅、先日の花形見と

同前、

一 菖蒲、木所羅國、聞八少も羅國の聞

無御座候、先日御物のあやめ、於御前

焼申候、残木進上仕候、又本能寺、菖蒲

と申て、一筋御座候、同進上申候、此香

八前のあやめより八香[健]二御座候、

一 般若 聞[黛]と同前、上々伽羅、焼出

し八少あたらしく御座候、火末は

似と同前、

一 鷓鴣斑 聞本銘の香、手次いまだ聞

不申候間、分別無御座候、何の木所にて

もおおきり申候て、木色黄に候ハ、

しやこばんなり、

一 楊貴妃、上々伽羅、聞うつくしくかう

ばしき内、針にてしほくとつき申候様な

る、聞御座候、火末ハ似と同前、

一 玄宗、上々伽羅、聞うつくし見候而、まる

くとしたる、聞御座候、香一段ふるく、火

ずえハ楊貴妃と同前、

一 [青]梅、木所伽羅、木色うすくしろく

御座候而、青梅のき、御座候、

一 飛梅、いまだ本銘き、不申候。

一 種嶋、本銘聞不申候、前々雖聞申候、

髓に覺不申候、

一 漂漚、上々伽羅、雖然手次の本銘髓

に聞不申候間、分別無御座候、

一月、上々伽羅、聞いかにも古くかく

花やかに御座候、小糸、伽羅月似申候、

禁中より出申候、

一 龍田、上々伽羅、古今にも稀なる聞

御座候也と申伝候、山陰も同前のよし

申ならハし候、

一 紅葉賀、手次たしかに聞不申候間、

分別無御座候、

一 斜月、聞、立田に似申候、上々伽羅にて

御座候、

一 白梅、上々真那班に御座候、中川よりハ、

香[健]に御座候、

一 千鳥、聞上々の伽羅に御座候。手次たし

かに聞不申候て、分別無御座候、

一 法花、伽羅、聞珍敷聞に御座候由申候、

本銘不存候間、分別無御座候、

一 老梅、木処ハ伽羅に御座候へども、伽羅の

やうには無御座候、一段めつらしき聞御座候、

一 八重垣、[木]処伽羅聞、香[健]に御座候、

一 花宴、正銘聞不申候、稀に聞申候は、

真那賀の香あしく候間、分別無御座候、

- 一 花雪、前に同じ、
- 一 賀、前に同じ、
- 一 蘭子聞、上々真那班一段と古く、上々に御座候、
- 一 卓、不存候、
- 一 橘、聞上々真那賀、花たち花よりは、聞静に御座候而、未久しく御座候、
- 一 花 散里 聞不申候、
- 一 丹霞、木処伽羅、聞健に御座候、進上仕候。
- 一 花形見、聞新伽羅、一段花やかにめづらしく御座候、
- 一 上薰、未聞申候、
- 一 須磨、上々真那班、
- 一 明石、同前
- 一 十五夜、いまた聞不申候、
- 一 隣家、聞いかにも古き伽羅にて御座候、
- 一 夕時雨、上々真那賀、
- 一 手枕、未聞申候、
- 一 有明、真那賀、香あしく御座候、本銘手、次たたく聞不申候間、分別無御座候、
- 一 雲井、真那班、本銘不存候、
- 一 紅、上々伽羅、
- 一 二葉、ふるき羅國、
- 一 寒梅、上々まなばん、一段古く上々二御座候、

- 一 初瀬、新伽羅、花形見に似申候、
- 一 早梅、真那班上、
- 一 霜夜、不存候、
- 一 寢覚、真那班、上但本銘聞不申候、慥に不存候、
- 一 七夕、いかにも古き真那班上、
- 一 篠目、伽羅、但本銘慥に不存候間、分別無御座候、
- 一 薄紅、伽羅聞かろく御座候、
- 一 薄雲、同前、
- 一 上馬、上々伽羅、
- 一 木処之事、伽羅、羅國、真那班、真那賀、何も其内、上々 乃 銘香由緒手継たしきを、五炷 程 づ被聞召候は、自然に木処ハ御覚御座有べく候哉、
- 一 鼻の心持乃事、右重左半と申事、御座候、口上如申入候、可有御分別事、
- 一 香焼やうの事、寒梅 冬 の季に入申候てより、冬至にいたるまで、可然候、是過候てハ早梅よく御座候、四季ともに此心持可然哉の事、
- 一 火あいの事、大なる火を入れて、しばらく逗留候て、いかにも火をふるくなして底をつよく、上をよ八き程なる やう、よく候、

右、此一冊雖為憚至極迷惑二候、内之御

意之由候間、不及是非、存知之旨申上

候、一向無功儀候間、相違而已可有御座候、

他之嘲如何二御座候条、被成其御心得

以御隠発、御披露所仰候、恐惶謹言、

天正元年十月吉日 建部隆勝 在判、

道甫参、

建部氏香之記考正、

惣別八（此八の字衍文今削之、）

五度三度 此五度の下に字、異本に

あり、本書今補之、

法隆寺、蘭奢待 かた書の一二乃字、

別本には各なし、後人の加筆なるべし、

故なき事なり、今削之、

折やう別にあり、一本に別にすべし、

に作る、

ゑて、今恐てに改む、宗温の書にも恐

てに作る、

香の数と、と、異本にをに作る、これに

随ひて、今本書改之、

高かう記 うの字、かに作るべし、今本書

これを改む、

あひしらひも ら字に字に作るべし、

本書今改之、

代黒 黛に作るべし、諸本各同、

ちゝ見（縮イ子り複イ） 此下の細字後人の注なり、

ちゞ見ハ縮字なりと云事也、子り短イ 此注

今削之、何の故なき事なり、

端午 此下本能寺とも云と、細注異本

にあり、今補之、博廣にそのふ、

真□、□字不分明、今以異本、薦

の字に改む、

如此候。斟酌 候之下、斟字の上乍乃

字異本にあり、今本書補之、

注近ゝ 異本に注進之申候二作る、今本

書依之改正す、

ほそかたき（一小本ノマゝ未明） 此書入旧板有之、今本書

削之、無用の事なればなり、ほそがたき

聞と云事を、後人あやしく思ひて此注

を添ると見候たり、なる程細かたき聞と

云事あるべし、

代黒と同前、今黛に改、考前に同じ、

一□梅、□字、当作青諸本同之←

建に御座候、建字、恐ハ健字なるべき候、

すこかと読べし、

八重垣、此下、木字脱、以異本今補之、

一花雪前に同じ、此下一焼、前に同じ、の文あり、他本各無之、考之、又何は故なし、依之、本書削之、

一花聞不申、旧板花の字の下、散里の二字脱、今考異本、本書補之、

其内上を、上々のに作るべし、本書これを改む、

五炷斗、斗字一本程に作る、今改之、

つづみ、此ミ字、衍文ゆへ今削之、

被聞、此下、召字脱、今以異本、補之、

□いひ候、由一本は、に作るいひ候、一本無

之文章通じがたきにより、今随実本、改之、

寒梅の季、の字上、冬字、異本に有之、今本書補之、

注なる儀、儀、一本やうに作る、今本書改之、

奥書の中、一向無、此無の字の下、功

の字異本に有之、今本書補之、者一

本間に作る、今改之、与巳、異本而已に

作る本書隨之改正す、

隆勝の(在判)の字、一本にあり、又、道甫(参)

と云、当名あり、本書今補之、道甫ハ

宗拾門人なり、

右建部氏香之筆記、誤字脱漏
改正する事如此、
大枝流芳考正、

(続く)

(いしばしけんたろう／当館主任学芸員)

広島県立美術館 研究紀要 第9号
BULLETIN OF HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM No.9

発行日 2006年3月31日

編集・発行 広島県立美術館

Hiroshima Prefectural Art Museum

〒730-0014 広島市中区上幟町2-22

2-22 kaminobori-cho Naka-ku Hiroshima City 730-0014 JAPAN

Tel.082-221-6246 Fax.082-223-1444

印刷 大成印刷株式会社

〒731-0138 広島市安佐南区祇園3丁目24-17

Tel.082-875-3232